あやめ刈りと鷹狩り

―『伊勢物語』第五十二段の解釈をめぐって―

徳植俊之

一　はじめに

『伊勢物語』は『源氏物語』と並ぶ平安文学のベストセラーである。写本の数もさることながら、古注を含めて多くの注釈書が作られ厚い研究史を誇り、各章段の解釈はもう出尽くしたようにも思われる。しかしわずか数行のごく短い章段の中には、まだ十分に解釈されていないのではないかと思われるものもあり、さらなる検討の必要な章段もある。本稿では、そうした章段の一つとして、第五十二段を取り上げたい。なお『伊勢物語』の本文は「学習院大学蔵本」（武蔵野書院刊影印本による）に、和歌本文及び歌番号は『新編国歌大観』にそれぞれより、適宜漢字をあて、必要箇所には傍線を施した。

二　第五十二段の解釈をめぐる問題点と諸説

むかし、おとこありけり。人のもとよりかさなりちまきをこせたりける返事に、

あやめかり君は沼にぞまどひける我は野にいでてかるぞわびしき

とて、きじをなむやりける。

この段は『大和物語』（第百六十四段）にもほぼ同文で見える。[1]「人」から「かさなりちまき（「飾り粽」とも）」を贈られた「男」が、その返事に「あやめ刈り」の歌を返し、雉を返礼の品として贈ったという話である。ただ、あまりに短い章段であるために、そのやりとりの意味が解しにくい。まず第一に「粽」をよこした相手は誰であるのか、ということと、「粽」を贈ってきた意味は何であったのかという点。第

二に、贈られてきた物が「粽」であるのに、男の歌は「あやめ刈り」となっているのはなぜかということと、「君は沼にぞまどひける」に込められた意味は何か、ということ。第三に「われは野に出でて狩るぞわびしき」に込められた意味と、返礼の品として「雉」を贈った意味は何かという点である。

従来から指摘されているように、章段内には「粽」と「雉」、「君」と「われ」、「あやめ刈り」と「(野の)狩り」、「沼」と「野」、「まどひ」と「わびしき」というように、語彙が対比的にちりばめられている。「粽」を贈ってきた「人」と「男」とを対比しているのは明らかなのであるが、その意味するところがもう一つよくわからず、全体として何を言いたいのか伝わってこない。従来の解釈は、次に挙げるように様々である。

森本茂は、「あやめ刈り」の歌について、相手が「苦労してあやめをとってきて、粽を贈ってくれたことに感謝し、さらに、私もあなたに負けないほど苦労して、野に出て雉をとってきたのですと相手に知らせた歌」とし、五月五日が薬狩の日である縁でこの歌を返したとする。[2]

石田穣二は、「上句は、ちまきを作って贈ってくれた相手の労苦を謝す意であるが、『飾りちまき』に菖蒲が添えてあったとも、菖蒲がその飾に用いられていたとも見ることができる。あるいは、ちまきに菖蒲を用いたとする見方も、一概に否定はできない。下句は、自らの労苦、ひいては相手に対するわが志の深さを言う。同音の『刈る』『狩る』が対照的におかれている。[3]」と解釈する。

渡辺実は「粽は端午の節句のものだが、五月五日はまた薬用の鹿の角をとる薬狩の日でもあったという。ここでお返しにあてられたのは雉子だが、季節感の充実した歌であったろう」とする。[4]

しかし、いずれの解釈も今ひとつすっきりしない。森本や石田の解釈のようにお互いの労苦をねぎらうというだけでは、わざわざ章段として物語るほどのこととも思われない。何かこのやりとりに文学的な修辞かこめられた意味があったと考えたくなる。また、渡辺の季節感の充実した歌というのも、後で指摘するように五月の雉狩り(鷹狩り)はまったく季節外れであることから否定される。

このように従来の解釈では十分に理解できないことを指摘した上で、新解釈を提示したのは竹岡正夫である。竹岡は、天福本特有の「かさなりちまき」の本文を取り、これはついうっかりして「粽」を二度贈って来たことを表すとした上で、次のように解釈する。

こんなに間違ってちまきを贈って下さったのは、あなたが五月五日の行事に必要なあやめを刈るために沼の泥の中で随分難儀なされたためのお疲れからつい出た事でしょう。実は私もあやめを探し求めて、そんな物の全く生えてもいない野原に出かけてさんざんな目に会いました。そう言っ

ても五月五日のそのちまきの返礼としては季節外れで、いかにも場違いな、しかしすこぶる御馳走の雉を贈った。どちらもあやめ刈りにへとへとに疲れた末、頭も混乱して仕出かした間違いという点ではおアイコというふうに、男は、相手の失策を、自分もとぼけてわざととんでもないお返しをすることによりカバーしてやった、というのが本段の主題と解される。[5]

この竹岡の解釈は一つの解釈として十分成り立つとは思われるが、その前提として「かさなりちまき」の本文を本来のものとしなければならない。多くの諸本に見える「飾り粽」ではなり立たない点に問題がある。「かさなりちまき」の用例がほかになく、誤写の可能性もある中で、それを前提とした解釈を採ることには、にわかには従いがたい。

また、片桐洋一は「かさなりちまき」ではなく「飾り粽」の本文を採用した上で、次のように解釈する。

「かり」は「かり」でも、相手がその季節にふさわしく、沼を尋ね歩いて「あやめ刈り」をしていると表現できるように時宜を得た贈り物をしたのに対して、野に出て季節はずれの狩りをしている自分がいやになる。このような行き違いで、今日もまた出会いの機会を失った自分を、わびしく、つらいと思っているのである。なお、飾粽を贈るという繊細さとやさしさから見て、相手を女性と見るのが自然であろう。[6]

しかしこの片桐の解釈も、相手を女性と見て、その女との出会いの機会を失ったなら、相手から恨み言を言われてもおかしくないはずだが、その女が、わざわざ粽を贈ってきたことの説明がつかない。この「粽」を贈ってきた相手は、秋山虔が、「『刈り』に同音の『狩り』を対照させたほか、『沼』に『野』を、『まどふ』に『わびし』を呼応させ、一首の中に親密な連帯の心情を十全に表出した。なお、この『あやめ』は端午の日、屋根に葺くためのもので、粽に添えて贈られたのだろう[7]」と指摘するように、親密な友人ととる解釈もあり、おおむね諸注釈は相手を「女」と断定しない。

ところで、これら従来の解釈に対して、河村奈穂子は「節日」という新たな視点から解釈しようとした。[8] 河村は、「粽」と「あやめ」は五月五日の節日に深く関わるのに対し、「雉」は九月九日の重陽に関わるものとして対照的に配置されており、「互いに節日にふさわしい長寿を願う意をこめて贈り物をしたという、節日を主題として構成された段」と解釈する。雉と重陽との関わりについては、「粽」の起源にも関わる屈原が、菊の滋液を飲み菊花を食すことで長命を保ったことで重陽を題材とした漢詩にも取り上げられ、その屈原の『楚辞』「天問」に長寿の食として雉の羹が登場することから、重陽の延年の術として「菊」と「雉」が意識されていたと結びつける。しかし、「雉」と重陽との結びつきについてはかなり論に飛躍があり、首肯しがたい。

そもそも、河村のような解釈が出てくる背景には、季節外れの「雉」をどう捉えるのかがわからないからである。『伊勢物語知顕抄』以来、男の和歌結句の「わびしき」の「しき」に「きじ」が掛けられているとする説があり、[9] 近代に至っても森本茂などがその説をとるが、こうした牽強付会とも言うべき解釈がとられてきたことこそ、本章段の難解さを象徴していると言えよう。

そこで、この段の解釈を再検討するために、「粽」と「あやめ刈り」との関係、男の和歌上句にこめられた意味、下句の意味と「雉」を贈ったことの意味、そしてそれらをふまえた上で「人」は誰を指すのかといった点について考察したい。まずは、「粽」と「あやめ刈り」について検討する。

三　「粽」と「あやめ」

「粽」も「あやめ」もともに五月五日の端午の節会に関わるのであるが、和歌中に贈られてきた「粽」を直接詠み込まずに、「あやめ刈り」と初句に詠んだことについては、古来様々に解釈されてきた。夙に『伊勢物語知顕抄』が、「かざりちまきとは、五月五日にあやめをこまかにわりて、その根をきざみて中に入れて、色々なる糸をもて指の程に小さく巻きて、時の花菖蒲、なでしこ、紫陽花、しもつけあふちの花を美しく飾り、巻きたるなり」とするほか、森本茂は「飾り粽」を「あやめの葉で巻いたらしい」とする。[10] また、あやめを「飾り粽」に添えて贈ったとする秋山虔の解釈もある。[11] これに対し、『伊勢物語肖聞抄』は「あやめにて粽をする事はなけれども、当日の事なればかくよめり」とし、これは『伊勢物語闕疑抄』『伊勢物語拾穂抄』などの古注を経て、片桐洋一の『全読解』などに踏襲されていく。

ここで注目したいのは、『古今著聞集』巻十八「飲食」所収の逸話「長谷前々大僧正覚忠、俊恵法師と粽の歌を贈答の事」である。

長谷の前々の大僧正、五月五日、人々にちまきをくばりけるに、俊恵法師聞きて、そのうちにいるべきよし申し遣はすとてよみける、

あやめをば外に借りても葺きつべし粽ひくなるうちに入らばや

返し、僧正

はづかしや院のあやめをおきながら粽引く名の空にたちぬる

（本文は新潮古典集成『古今著聞集』下、三〇六・七頁）

南波浩は、この『古今著聞集』の逸話から、「平安末期にはあやめとちまきと関連のあったことが推察される」と指摘する。[12] 返歌の上句は意味が解しにくいが、南波の指摘は首肯される。おそらく五月五日の節句から「粽」と「あやめ」を

連想するのはそう特別なことではなかったであろう。[13]

ところで、同じ端午の節句に用いられる「薬玉」の場合は、次に挙げる『蜻蛉日記』や『基俊集』の例から、薬玉の芯にあやめの根が用いられたか、あるいは添えられていたことが窺われる。「薬玉」に「あやめの根」は付き物であったのである。

五月になりぬ。菖蒲の根長きなど、ここなる若き人騒げば、つれづれなるに、取り寄せて、貫きなどす。

（蜻蛉日記・下巻・天禄三年五月）

五月五日、三条大納言のもとに薬玉つかはすとて

あやめ草岩垣沼のながき根を君がためにぞ玉にぬきつる

（基俊集・二九）

「あやめ」は邪気を払う物として端午の節句には軒に葺くなど様々な形で用いられていたので、「粽」にもあやめが何らかの形で添えられていた可能性は考えられる。いずれにしても、「粽」から同じ五月五日に付き物の「あやめ」は容易に連想され、『肖聞抄』のような解釈もなり立つとは思われるが、さらに森本が指摘するように、通常は「葦・笹・菰などの葉で巻き、藺草でしばった」ものをここはあやめで巻いた（『森本全釈』）とすれば、なおこの場面が解釈しやすい。

このように、「粽」から「あやめ」が容易に連想されると して、それでは「粽」を贈られたことに対して、なぜ「あやめ刈り君は沼にぞまどひける」と答えたのだろうか。「まどふ」にこめられた意味は何だったのだろうか。

四　「あやめ刈り」と「沼にまどふ」考

そもそもあやめを刈るとなぜ沼で「まどふ」ことになるのだろうか。それは、あやめが沼などの湿地帯に生える植物だからである。『麗花集』二九、『後拾遺集』巻十・哀傷・五八二は、まさにそうしたあやめの性質を歌った一首である。

村上の御時の歌合　　よみ人しらず

あふことをいつかとまつにあやめぐさいとどこひぢにしげるめるかな

（麗華集・二九）

赤染、匡衡におくれ侍てのち五月五日によみてつかはしける　　美作三位

墨染のたもとはいとどこひぢにてあやめのくさのねやしげるらむ

（後拾遺集・五八二）

両歌に詠まれた「こひぢ」は「泥土」のことで、夙に『和名類聚抄』（巻一―十三ウ）「泥」に「和名比知利古一云古比千」（傍線筆者）とある。[14] そのぬかるんだ中に入ってあやめを刈り、根を取るということになると当然泥まみれになり、袖も濡れることになる。そのために、「こひぢ（泥土）」に

「まどふ」のである。一例として、『後拾遺集』第十三・恋三・七一五を挙げておく。[15]

陽明門院皇后宮と申しける時、久しく内にまゐらせたまはざりければ、五月五日、内よりたてまつらせ給ける　後朱雀院御製

あやめぐさかけしたもとのねをたえてさらにこひぢにまどふころかな

このように「こひぢ」に生えたあやめや、それをとることの難儀を詠んだ歌の用例はほかにも多く見られる。[16]

ところで、これらの「こひぢ」には「恋路」の意味が掛けられている。『袖中抄』巻十六「こひぢ」の項には、次のような記述が見られる。[17]

サミダレニナヘヒキウフルタゴヨリモヒトヲコヒヂニワレゾヌレヌル

顕昭云、コヒヂトハ順和名云、泥トイフ文字ヲコヒヂトヨムナリ　ソレヲ恋ノ路ニソヘヨムナリ　サレバソデヌラストモオリタツトモ　ミナ泥ノ心ヲヨムナリ　而近来ノ人偏ニ恋ノミチトソヘテ　水ニヨスルコヽロヲワスレタリ（傍線筆者）

『袖中抄』には「袖濡らす」「下り立つ」といった句の例も出ている。[18] このように見てくると、第五十二段の男の歌「あやめ刈り君は沼にぞまどひける」は、「こひぢ（泥土）」ゆえに「まどふ」と詠んだのである。そして、「こひぢ」は「恋路」を連想させる。つまり、男の歌の上句は、相手が「恋路にまどふ」ことを暗に詠んでいるのである。

五　「野に出でてかるぞわびしき」考

上句が相手の恋路に惑うことを詠んだとすると、下句にはどのような意味がこめられているのであろうか。

まず押さえておかなければならないのは、すでに竹岡正夫や片桐洋一も指摘しているように、[19] 五月の鷹狩りは季節外れだということである。竹岡は五月の鷹狩りの例が当時の文献にないことを理由にあげるが、むしろこれが時季外れのことであるのは、『賀茂保憲女集』序文に、

鷹といふ鳥を夏の野にかりしてあそぶことなし、松の子の日、いつもおほかれど、夏の野にいでてひかず、あやめぐさおほかりといへども、春の子の日にひかず、（傍線筆者）

とあることから確認できる。時代は下るが、『新撰和歌六帖』「ひなどり」題の歌に、

夏ふかきまだかりそめぬあはづののきぎすのひなの草がくれ

つつ　　（二五六一・家良）

の一首が見え、夏は雉が雛を育てている時期であったことも、五月に雉を捕らない理由の一つであったかもしれない。

さて、五月五日の狩りとしては、『日本書紀』に「五月五日に、天皇、蒲生野に縦猟したまふ」（巻二七・天智天皇・七年）の記事があることから、これを「薬狩」とする解釈もある。むろん薬狩では贈り物の雉と合わない。ただし、同じく『日本書紀』では推古十九年の記事にも「夏五月の五日に、菟田野に薬猟す」とあり、奈良時代以来、五月五日の「狩り」と言えばまず「薬狩」が連想された可能性は高い。しかし、実際には「雉」を返礼品として返しているのだから、男は薬狩ではなく、時季外れの鷹狩りをしたわけである。したがって、下句は五月五日にふさわしい行為、あやめ刈りでも薬狩でもなく、自分は時季外れの鷹狩りというなんとも場違いな、ピントのずれた行為をしてしまったということを詠んでいることになる。この解釈の方向性は、竹岡の注釈と重なる。

なお、男の歌の「かる」に「離る」が掛けられていると見る解釈がある。[20] 魅力的な解釈ではあるが、猪平直人が自身の論文中でも触れているように、その場合、語法的には「かるるぞわびしき」でなくてはならない。この掛詞を認めて「かる」で文が切れるとすると、「離る」は「わびし」にはつながらなくなり、文脈の点で難しい。「離る」の意味が響いている可能性は否定しきれないが、掛詞として認定するのは無理であろう。

ここまでの解釈を整理すると、「粽」を贈られた男は、和歌の中で、あなたは五月五日にふさわしくあやめ刈りをしたが、その実は恋路に惑う状態であった。それに対して、私は野に出たものの、この日にふさわしい薬狩ではなく、間抜けなことに時季外れの鷹狩りをしました、と歌を返し、しかし時季外れとは言いながら、ちゃんと「雉」を返礼の品として贈った、という話ということになる。ただ、この解釈では、五月五日という節日と恋との関係、それから、「粽」を贈ったのは誰かという点が明らかでなく、その点を解明する必要がある。

ところで、節日と恋という点については、王朝の人たちは端午の節句などの折々の節日を口実に恋歌を贈っていたことを押さえておきたい。

五月五日、ある女のもとにつかはしける　よみ人しらず

いつかとも思はぬ沢のあやめ草ただつくづくとねこそなかるれ　（拾遺集・恋一・七六七）

五月五日に人のもとにつかはしける　和泉式部

ひたすらに軒のあやめのつくづくと思へばねのみかかる袖かな　（後拾遺集・恋四・七九九）

五月五日、女のもとにいきて、またの昼つかた

けふこそは君を見ぬまのあやめ草よどのをこふるほどのはかなさ　（兼澄集・五五）

五月五日、女のもとに侍りしに、うちやすみしに女入り侍りしかば

うたたねの昼寝の夢にあやめ草むすぶとみつるうつつならん　（兼澄集・六三）

同じ人、心憂きことや聞きけん、うじたれば、女もむづかりてあはざりければ、五月五日に、男

うきことをいつわすれてかあやめ草たえぬしたねを立ちゐまつらん　（馬内侍集・三八）

かへし

わすられぬうきにつけてもあやめ草いかにしたねのながからめやは　（馬内侍集・三九）

五月五日に、この君

郭公いつかとまちしあやめ草けふもいかなるねをかなくらん　（馬内侍集・五四）

かへし

五月雨の空くもりするほととぎす時になくねは人もとがめず　（馬内侍集・五五）

特に、『馬内侍集』三八・三九の贈答歌は、気まずい関係になっていた相手の男が、五月五日に復縁を迫って歌を贈っている点で注目される。男の歌は「うき」に「憂き」と「浮き」を掛け、「浮き」との対で「下根」を詠む。「したね」の「ね」には「寝」が掛けられ、共寝の機会を待っていると詠んでいる。

このように、節日は恋が始まる、あるいは復縁する絶好の機会として捉えられていたことが窺われる。

六　「粽」を贈ること

では、「粽」を贈ってきたのは誰であったのだろうか。そのことを考察するために、五月五日の端午の節句でどのような物が、誰から誰へ贈答されていたのか、当時の実態を示す具体例を挙げて検討したい

まず、「粽」を贈った例としてよく挙げられるのは『拾遺集』巻十八・雑賀の例である。

五月五日、小さき飾り粽を山菅の籠にいれて、為雅の朝臣の女に心ざすとて　春宮大夫道綱母

心ざし深きみぎはに刈る菰は千年の五月いつかわすれん　（巻十八・雑賀・一一七二）

ここでは、道綱母が為雅女に「飾り粽」を贈っている。為雅女は道綱母の姪であろう。『尊卑分脈』によれば、道綱母の姉妹（おそらく姉）が為雅妻となっており中清を生んでいるほか、為雅には義懐室と章斉妻の二人の女子がいたことが

わかる。二人の女子の母は記載がないが、そのいずれかであった可能性は十分考えられる。

このほかに「粽」を贈った例としては次の諸例をあげることができる。

三宮にこちまきたてまつるとて

五月待つほどにさはみづまさりつつ淀の真菰もおひにけるかな　（元真集・一七八）

石蔵の宮の御許に、ちまき奉るとて

ふかざはの菰をぞかける君がためたまは衣の袖にかくらん　（和泉式部集・四九七）

返し

ふかざはのこまはかたみにかりけりと君は涙の玉ぞかかれる　（和泉式部集・四九八）

五月五日、ちまきを人のもとにやるとて

ふかさはだみぎはがくれのまこも草昨日あやめにひかされにけり　（和泉式部集・五一二）

かたらふ人の来るに、粽やるとてしきたる紙に

夢にだもあふとみるこそうれしけれのこりの頼すくなけれども　（和泉式部集・五二七）

『元真集』の三宮は村上天皇第三皇子の致平親王であろう。「こちまき」は「小粽」か「籠粽」のいずれかと思われるがほかに用例がない。おそらく、まだ幼かった致平親王に元真が「こちまき」を贈ったものと考えられる。

『和泉式部集』には三例見られる。四九七の「石蔵宮」は和泉式部と敦道親王との間に生まれた子。五一二の「人」は不明。五二七は「かたらふ人」とあるので恋人であろう。ただし、五二七の場合、恋人が和泉のもとを尋ねてきたので「粽」を贈っている。和泉の方から、わざわざ男のもとへ贈ったのではない点を確認しておきたい。

これらの例を見る限り「粽」は様々な人に贈られているが、その中でも幼い子に贈られることが多く、女の方から能動的に男に贈った例は見当たらない。

では、「粽」以外にはどのような物を誰に贈っていたのであろうか。まず挙げられるのは、「薬玉」である。『源氏物語』「蛍巻」には、「薬玉など、えならぬさまにて、所〳〵より多かり」[21]と、五月五日に玉鬘のもとに多くの薬玉が贈られている様が語られている。

また、『小大君集』・『赤染衛門集』・『基俊集』などにも「薬玉」を贈った例が見られる。

薬玉、女のもとにやる、男にかはりて

沼ごとに袖ぞぬれぬるあやめぐさ心ににたる根をもとむとて　（小大君集・一八）

返し、きよはらどのの女御

苦しきに何もとむらんあやめぐさあさかの沼におふとこそきけ
（小大君集・一九）

ちごを人にとらせておぼつかなげに思ひたる人、五月五日、薬玉をやるにかはりて

いかさまにおひなりぬらむあやめ草みぬまはねのみたえぬ袖かな
（赤染衛門集・三七二）

五月五日、三条大納言のもとに薬玉つかはすとて

あやめ草岩垣沼のながき根を君がためにぞ玉にぬきつる
（基俊集・二九）

「薬玉」の場合、贈る相手は女であったり、我が子であったり、高位の貴族であったりと様々である。『小大君集』の例は、男が女に薬玉を贈った際に添えた歌を小大君が代作した一首である。相手の女「きよはらどのの女御」について、竹鼻績は西本願寺本により「宣耀殿女御（藤原済時女娍子）」であり、代作を依頼した男は「小大君と同じように東宮に仕えていた人物であろう」と推定する。なお、竹鼻は、薬玉にあやめの根があしらってあるところから「あやめ」を詠み込み、「沼ごとに袖ぞぬれぬる」は「『沼』から湿を連想させ、憂き恋のために袖を涙で濡らしたことをいう」（傍線筆者）と指摘する。[22]『赤染衛門集』の一首は、人にひきとられた我が子に贈った歌を赤染衛門が代作した一首である。このほかに、先にも触れた『蜻蛉日記』天禄三年五月の記事では、薬玉は兼家邸や、道綱の思い人「大和だつ人」のもとに贈られている。

さて、五月五日には薬玉だけではなく「あやめの根」も贈答されている。

五月五日、男、女のもとにながき根おこせたりければ、女にかはりてよめる

袂にはかりにもかけじ人心見ぬまにひけるあやめとおもへば
（散木奇歌集・二九三）

絶えて久しくなりたる女の思ひ出でて、五月五日にながき根をつかはすとて

あはぬまはおふるあやめの根をみつつたとふ涙のふかさをばしれ
（頼政集・四六六）

返し　小侍従

影だにもみぬまにおふるあやめ草あさきためしのねにぞくらぶる
（頼政集・四六七）

ここでは、いずれも男が女にあやめの根を贈っていることに注目したい。「あやめの根」は長く、また泥土に深く埋まっていることから、思いの深さをたとえるのにふさわしく、また「根」は「音」と掛詞になるので、恋歌には使いやすい歌材であると言えよう。

以上、五月五日の端午の節句に際して、「粽」「薬玉」「あ

やめの根」を贈った例を検討した。これらの品々は邪気を払うという趣旨から幼い子に対して贈られたり、また、この日が恋の契機となる節日であることから、「あやめの根」に掛けて、男が恋の相手である女に対して贈るなど様々なケースが見られたが、女から能動的に男に贈られた例は見当たらない。これだけの用例で第五十二段の相手「人」が男であったと断言することはできないが、ただ、親しい友人との贈答であった可能性が高いと見るべきではないだろうか。

また、「粽」や「薬玉」が幼い子に贈られることが多いことを考えると、この「飾り粽」を贈ってきたことには、「男」に対するからかいの意味、親しいもの同士の戯れ、冗談といったニュアンスを読み取ることも可能であろう。いずれにしても、「飾り粽」は友人から贈られてきた物とみたい。

七　まとめ

ここまで検討してきたことから、第五十二段は次のように解せよう。

親しい友人から「飾り粽」を贈られた男が、和歌で返事をした。あなたは私に贈る「飾り粽」を作るために沼に入ってあやめを刈り、そのために「こひじ（泥土）」に難儀した、でも実は「あやめ」ならぬ女を手に入れるために、恋路に胸を焦がし惑ったことでしょう。それに対して私はというと、薬狩ではなく、何と時季外れの鷹狩りをしに野に出たことでした。あなたが恋路に惑っている間に、私はと言うと、何の恋の成果も上げられませんでした、と歌を返し、でも本当は私もちゃんと獲物の雉を採りました、と返礼の雉を贈った。

この雉には、恋の成果を暗示していると見るとこの段はわかりやすい。つまり親しい者同士が、恋の成果を競い合っている話というのがこの段のテーマであったのではないか。

〈注〉

（1）『大和物語』第百六十四段本文は次の通りである。

在中将のもとに、人のかざりちまきおこせたりける返しに、

かくいひやりける。

あやめ刈り君は沼にぞまどひけるわれは野にいでてかるぞわびしき

とて、雉をなむやりける。（本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。）

（2）森本茂『伊勢物語全釈』大学堂書店、二五四～五頁。

（3）角川文庫『新版伊勢物語』一三二～一三三頁。

（4）新潮古典集成『伊勢物語』六七頁。

（5）『伊勢物語全評釈』右文書院、八二四頁。

（6）『伊勢物語全読解』和泉書院、三九九頁。四〇〇頁にも同様の趣旨が述べられている。

（7）『竹取物語・伊勢物語』岩波書店・新日本古典文学大系17、一二九頁。

（8）河村奈穂子「『伊勢物語』第五十二段の粽と雉―節日を主題として―」（『甲南大學紀要　文学編128』平成十五（二〇〇三）年三月）

(9) 『伊勢物語知顕抄』（『続群書類従』第十八輯上、五一〇頁）には、次のようにある。

さてちまきのかはりにきじをかへすといへり。うたにわびしきとよめるは、きじをうちかへしてよめる也。この哥のすへを、あるほんには、かくばかりきじとかけるしいかに。このうたをしるしていはく、きじをかくし、だいによめるといへり。

(10) 注2に同じ。

(11) 注7に同じ。

(12) 朝日古典全書『竹取物語・伊勢物語』朝日新聞社、三八二頁。

(13) 『古今著聞集』巻十九（六六五）「泰覚法印、五月五日菖蒲を贈りて詠歌の事」には、次の逸話も見える。

泰覚法印、五月五日、人のもとへ菖蒲を遣はすとて読み侍りける、

わりなくぞあやめのふちを志すちまき馬をや引きいだすとて

この「ちまき馬」は子供のおもちゃとして茅や真菰などで作られた人形の馬。「あやめ」を馬の鞭（ふち）に見立てている。食品としての「粽」とは異なるが、「あやめ」と「粽」の語の連想の例として挙げておく。なお、「ちまき馬」については、『散木奇歌集』（一五九七）に用例がある。

幼き児のちまき馬をもちたるをみて　承源法師

ちまき馬は首からきはぞにたりける
つくる人もなしときこえしかば
きうりの牛は引き力なし

(14) 『和名類聚抄』の本文は、『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店）所収「元和古活字那波道圓本」による。

(15) この一首は『栄花物語』巻三十四「暮れ待つ星」では「諸共にかけし菖蒲をひき別れ」、『大鏡』「道長（後日物語）」では「もろともにかけしあやめの根を絶えて」、『今鏡』「すべらき上・初春」では「菖蒲草かけし袂の根を絶えて」でそれぞれ載る。なお、本文は、『栄花物語』・『大鏡』は「新編日本古典文学全集」に、『今鏡』は「講談社学術文庫」による。

(16) 「根を深みまだあらはれぬあやめ草人をこひぢにえこそはなれね」（順集・一七「あめつちのうた」）、「浮き沈みねのみながるるあやめ草かかるこひぢと人も知らぬに」（狭衣物語・巻一・狭衣詠）などが例歌としてあげられよう。

(17) 本文は『袖中抄の校本と研究』（橋本不美男・後藤祥子著・笠間書院）による。

(18) 『金葉集』（二度本）巻七・恋部上の三五〇には「袖ぬる」の例が見える。

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける　小一条院

しらざりつ袖のみぬれてあやめぐさかかるこひぢにおひん物とは

「下り立つ」の用例は『源氏物語』「葵巻」の六条御息所と光源氏の贈答歌に見える。

袖ぬるるこひぢとかつはしりながらおりたつたごの身づからぞうき（六条御息所）

あさみにや人はおりたつわがかたは身もそほつまでふかき恋ぢを（光源氏）

（『源氏物語大成第一巻』池田亀鑑編著・中央公論社、二九五～六頁）。

(19) 竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院）八二二頁、片桐

洋一『伊勢物語全読解』（和泉書院）三九八頁。竹岡は、「雉の狩猟は冬と春初めのことで、（中略）当時の文献に徴しても、二・三月、九・十・十一・十二月に朝廷の鷹狩りが行われ、又冬の鷹狩りの獲物として引出物にされたりしているが、五月の鷹狩りの例は管見に入らない」（前掲書八二二頁）と指摘する。

(20) 上野英二「狩と恋―伊勢物語ノート―」（『成城国文学』16・平成十二（二〇〇〇）年三月、猪平直人「『大和物語』在中将章段考―「在中将」像の再検討―」（『文芸研究』（東北大学・日本文芸研究会）第一五一集・平成十三（二〇〇一）年三月）。

(21) 新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店）四三三頁。

(22) 竹鼻績『小大君集注釈』貴重本刊行会、三六～八頁。